

プレプリント版

掲載誌：都市史学会（編）『都市史研究』6（山川出版社、2019年10月）

*本稿はプレプリント（査読前論文）です。査読後および編集過程の文章校正等は反映されていません。

【研究動向】

「自由」空間としての街路—アジア・ヨーロッパ（一六〇〇〜一八五〇年）の都市空間とジェンダー研究のための新しいアプローチ—

Danielle van den Heuvel (ダニエラ・ファン・デン・ホイフェル)・Bob

Pierik (ボブ・プーリック)・Bébio Vieira Amaro (ゼビオ・ヴィエイラ・アマ

ロ)・Antonia Weiss (アントニア・ヴァイス)・Marie Yasunaga (安永麻里絵)

はじめに

過去の時代における男性と女性の関係性について、最も多く議論の対象とされてきたが同時に最も根強く残っている考え方のひとつは、「領域の分断」の理論である。歴史学と社会学の両分野において、1600年から1850年までの間に女性は都市の街路から次第に姿を消していったとするこの考え方は、これまで繰り返し議論の俎上に載せられてきた(1)。この理論では、女性はこの時期に次第に公共空間から姿を消し、家などの私的空間でより多くの時間を過ごすようになった、とされる。この言説は近代化の理論と密接に結びつく一方で、ジェンダーと都市空間をめぐる議論にある種の膠着状態を生じさせてきた。公共空間はしばしば男性のための空間、私的空間は典型的な女性のための空間と見做されてきたために、これまでの歴史学研究においては、近代化以前の都市におけるジェンダーの実態やその多分に複雑な力学が見過ごされてきたのである。

しかしここ数十年、都市研究とジェンダー研究の両分野において、このような「領域の分断」が、従来想定されてきたよりもずっと複雑な問題であることを指摘する重要な研究成果が発表されている(2)。また、「男性的な公共空間」対「女性的な私的空間」という区

分が従来考えられていたほどに明確に区分され得るものではないことも明らかになってきた(3)。例えば屋外の空間が必ずしも公的な空間であるとは限らず、同様に屋内であるからというだけの理由で必ずしもその空間が私的だとはいえないということは、複数の歴史家が指摘しているところである。公共空間が必ずしも男性的な空間であるとはいえず、また私的空間も女性的な空間であるとは限らないのである。さらに、都市生活に必然的に伴う女性にとってのさまざまな危険性が女性の移動可能な空間領域を制限することがある一方で、その逆の現象もまた生じ得ることが確認されてきた。Elizabeth Wilsonの研究によれば、家長長制がより大きな意味を持つ小規模コミュニティと比較した場合、女性は都市においてむしろより広範囲の領域を移動する自由を享受できたという(4)。また、より最近の歴史学研究では、公的／私的あるいは男性的／女性的といった従来の対立概念そのものを相対化し、単純な二項対立ではないものとして捉え直すことも試みられてきた。しかし、これらの研究においてもなお「公共」「私的」といった概念が研究の指針として機能しているため、ジェンダーが都市空間に及ぼす影響を詳細に把握することは困難な課題であり続けている。これらの見解を踏まえ、アムステルダム大学において近年始動した本研究プロジェクト *The Freedom of the Streets. Gender and Urban Space in Eurasia 1600-1850* (「自由」空間としての街路・アジア・ヨーロッパにおける都市空間とジェンダー 1600-1850) では、新しいアプローチと方法論を導入し、すでに議論され尽くされてきたかに思われる、都市空間へのアクセスという問題そして街路(ストリート)の所有権という問題に新たな知見をもたらすことを目指す(5)。

1 「公共／私的」に代わる概念としての「占有」オーナーシップ

女性と都市生活にかんする歴史研究の議論においては、「公共／私的」(public/private)という対立概念がなお支配的だが、一方で多くの歴史学者たちがこの分類カテゴリーには大きな問題があるとしてこれを疑問視しているのも事実である。そもそもある空間の特質が公的もしくは私的だとされるとき、具体的にそのことが何を意味するのかを厳密に確定することはきわめて困難であることは言うまでもない。Laura Gowling が初期近代のロンド

ンについての研究で明らかにしたように、今日ではしばしば理想的な「私的」空間と見做される「家」ですら、時にきわめて公的な性質を帯びることがある(9)。例えば、家の中でしばしば(公的な)ビジネスが行われていたほか、薄い壁や壁のひび割れを通して、本来私的と見做される空間での出来事であっても外部の人々が見たり聞いたりできてしまうことはしばしばあった、とGowingは指摘する(7)。したがってこのような場合において家や居間、寝室といった空間はどの程度まで「私的」空間といえるか、という疑問が生じるのである。さらに、ヨーロッパ以外の地域に目を転じ、これらの地域における空間利用の歴史を考察しようとするならば、ヨーロッパの歴史研究で登場したこの概念がどこまで適用できるのかが問い直されなければならないことは言うまでもない(8)。

先行研究においても、「公的／私的」空間をめぐる議論の行き詰まりを打破しようとするいくつかの試みがなされてきた。例えば、「公的／私的」空間に代えて「都市空間」(urban spaces)と「家庭空間」(domestic spaces)という用語の使用を提唱する歴史学者や、あるいは公共空間と私的空間の間にある境界的な中間領域を類別するために「閾」(Timinal)という新しいカテゴリーを加えることで都市空間を考察し直そうとする研究もある(9)。これらの解決策によって、特定の歴史的・地理的背景において(複数の)空間がいかに利用され経験されたかをより正確に理解することができる一方で、歴史的背景が異なる事例間の体系的な比較が可能になるまでには至っていない。さらに付け加えれば、「公的／私的」の分類を単に別の用語に置き換えた場合、かえってその歴史的コンテキストが失われてしまふ、という問題がある。というのも、これまでの研究が示しているように、これらの用語が複雑さを孕むものだとしても、初期近代においてそれらが重要な概念であったことは事実として認められるからである(10)。

上記の理由から、本研究プロジェクト The Freedom of the Streets においては別のアプローチを用いる。本プロジェクトでは、都市空間がジェンダーによって分節化されている過程を、「ストリート」つまり街路の「占有」(ownership)という観点から考察する。すなわち、街路という場がどのような人々によっていかなる活動のために使用されたのか、どのような人々が街路を自身の活動の場として自由に利用する権利を有していたのかを解

明することを通じて、都市空間のジェンダーによる分節化の実態に迫ろうというのが、本研究の問題意識である。本研究のこのような研究手法は、都市空間を社会的に生産されるものとしたルフェーブや、日常生活における具体的な行動と空間の関係性を論じたド・セルトールの都市分析など、すでによく知られた都市研究の理論から多くの示唆を得ている。同時に、近代および初期近代における街路の使用にかんする近年の歴史研究も参照している。これには例えば、Elizabeth Cohen の十六世紀ローマについての研究や、Danielle van den Heuvel による十八世紀の共和国期オランダの都市研究、および Tili Grallert (十九世紀のダマスカス) や André Sorensen (現代の東京) の研究が挙げられる(11)。本研究において「占有」(ownership)とは、フオーマル公式的な所有と非公式のインフオーマルその両方を指すものとする。したがって、法令や規則、不動産の保有といった公的な所有権や、公的機能による管理や権限といった組織的な所有体系のみならず、(多くの場合)街路の公的な所有権を持たない人物集団によって街路が使用されたり私物化されるといった、非公式の占有オナーリングも考察の対象とする。

日常生活における街路や広場の使用が、それらの空間のジェンダーによる分節化にどのように影響を与えるかを示すよく知られた例としては、噴水や洗濯場が女性によって洗濯に使われたのに対し、重要な商用建築や宿屋の周辺エリアは主に男性が訪ねる場所だった、ということが挙げられる(12)。このような場の使用のされ方から、「女性的」な都市空間と「男性的」な都市空間が二極化しているかにみえるかもしれないが、一次資料を紐解くと事実はそう単純ではないことがわかる。例えば、上流階級に属する女性は洗濯場を避けようとする傾向にあったし、また、初期近代の都市の商業区域では売春婦や行商人など若年層の女性が多く行き来していたことなどが分かっている。したがって、職業、出自、所得、婚姻状況といった社会的ステータスやそれに派生する属性について、それらがいかに相互に交差し関連し合うかを吟味する交差的な視点インターセクショナルに立った分析を踏まえることなくして、「男性的」／「女性的」都市空間がいかに機能するかを理解することは不可能なのである(13)。

しかし、さまざまな空間が単に何に使用されたのかを考察するだけでは不十分である。

そこで本研究では、「占有」^{オナーシング}の実態に迫るために、人々がそれぞれの場所を実際にどのような仕方で自分の活動の場としていたのかを具体的に明らかにすることを目指す。例えば「公式的な占有」^{フォーミュラ オナーシング}については、建造物の購入や建設、法律の施行といった問題が考察の対象となる。非公式な占有^{インフォーマル}については、能動的・主体的な場の利用に加えて、(例えば「ぶらぶら歩く」といったような)受動的な場の使用についても考察する。街路の使用権をめぐる喧嘩が起きることは日常茶飯事であり、こうした事例は都市空間の使用についてどのような主張がなされていたのかという点について極めて興味深い示唆を与えてくれる。この種の喧嘩では、誰がどのように街路のスペースを使用すべきかについて男性も女性も活発に論争を繰り広げていた様子が見てとれる。さらに一次資料は、こうした論争において、異性間や異なる社会階層間だけでなく同じ社会集団の内部においても、誰が通りを使用する権利を持つのかをめぐる対立が生じていたことを示している(124)。例えば、アムステルダムの一七一〇年の公証記録の証言には、織物市場の場所を確保するために複数の女性がお互いに身体的暴力を振るった、という記述がある(125)。

これらをふまえて『自由』空間としての街路「プロジェクトでは、街路という場の「占有」は、相互に関連する次の四つの要因によって構成されるのではないかという仮説を立て、これに基づいて考察を進める。すなわち、「ジェンダー規範」(gender norms)「統治制度」(governance)「物質的特質」(materiality)「移動(の可能性)パターン」(mobility)の四要素である。ジェンダー規範は、社会において男性と女性が果たすべきとされるそれぞれの役割をあらかじめ規定するものであり、この規範は男女の地理空間上の移動^{モビリティ}に影響を及ぼす。また、その街の統治制度の特徴が、人々が街の中を移動できる自由度を規定することは、先行研究ですでに指摘されているとおりである。たとえば、都市を「上から」管理する中央政府以上に、地元の行政組織が人々の移動に対してより積極的な影響力を及ぼしていたことが指摘されている(16)。経済、宗教、娯楽といった、都市の内部の空間に備わる様々な機能とは別に、都市空間の「フォーラム」あるいは「かたち」――本研究ではこれを「物質的特質」と呼ぶ――もまた、都市空間の「占有」に本質的な影響をもたらす。例えば広場のような大きく開かれた空間は、比較的閉ざされた小さな空間や路地などに比べ

て、空間を「占有」することが単純に難しくなる(17)。最後に第四番目の要素として、都市における人々の移動や存在（ある特定の場所に「居る」こと）もまた、都市空間のジェンダー化に影響を及ぼすと仮定する。街路の使用におけるジェンダーによる分節化は、上述したプロセスの結果を反映するのみならず、同時に、まさにそうした分節化を通じてジェンダー化された空間が形成されるのではないか、と私たちは考える(18)。初期近代のローマの洗濯場はこのような事象を端的に示す好例である。女性がその場所に居ることが、都市の中でも特にその場所には（特定の）女性が存在することが許されているのだ、という人々の感覚を強めていたのである(19)。上記で示した四つの要素を地図上にマッピングし視覚化することによって、いつ、どこで、どのようにして、初期近代の街路という場でジェンダーが立ち現れ、表明され、「場」の使用権に影響を与えてきたのかを明らかにすることが、本研究の主眼とするところである。

2 比較研究という方法

街路という場のジェンダー化を考察する新しい思考の枠組みを提示するとともに、本研究プロジェクトにおけるもう一つの重要な観点は比較研究の視点である。ジェンダーや都市空間における移動（モビリティ）をめぐる近年の言説の問題のひとつは、きわめて限られたいくつかの都市、すなわち十九世紀のパリ、ロンドン、ニューヨークというコンテクストを中心に議論が進められてきたことにある(20)。これらの都市がすべて西洋の、とりわけプロテスタント的特質を備え、また特定の都市開発を経験した背景をもつ都市であることを鑑みれば、都市の近代化とともに女性が街路から姿を消したという定説がどの程度他の都市に当てはまるかは疑問の余地がある。文化的なコンテクストが異なる都市ではどのような変化が見られるのか、これらの大都市と同様の発展が起きなかった都市では何が起こっていたのか、十九世紀以前の時代ではどうか、といった様々な疑問がたちどころに生じるのである。つまり、多くの歴史家と社会学者たちによってこれまで観察されてきた、都市空間におけるジェンダー化のパターンという定説がどれほど普遍的なものであるか、改めて考察し直す必要があるといえるのである。

この点について、近年の実証研究によって西洋の都市においても従来の歴史学が提示してきた以上にその実態は複雑であることが明らかにされてきていることは注目に値する。

このような先行研究をいくつか挙げるとすれば、Laura Gowing や Robert Shoemaker によるいずれもロンドンについての研究のほか、Elizabeth Cohen、Laurie Nussdorfer、Robert Dabbs といった歴史学者による研究はルネッサンス期のイタリアの複数の都市についてさまざまな新しい知見をもたらしている。しかしそれにもかかわらず、これらの重要な研究においてなお、研究対象となる場所が比較的狭い地域に限定されているのもまた事実である。その結果、現時点において私たちが初期近代の都市空間のジェンダー化について見通しを得ることができているのは、主に二つの地域（すなわちイタリアと英国）、それも特定の時代（それぞれルネッサンス期と十七世紀）に限られているといえる(21)。

ジェンダーと都市空間に関するこれまでの研究とは対照的に、本研究プロジェクトでは、通時的視野に立った比較研究の方法でこの問題に取り組む。その目的はひとつには、ジェンダーと都市空間の関係性が時代を追ってどのように進展したのか、その変遷を検証することにある。とくに初期近代から近代への移行に着眼するべく、本研究では一六〇〇年から一八五〇年頃までの二百五十年間という長いスパンを考察の対象とする(22)。また他方で、ジェンダーと都市空間が相互にいかに関与しているかを深く理解するには、より広い地理的地域に視野を広げることが本質的に重要である。そこで本研究では、異なる文化的背景をもつ事例の比較検証を行う。ここで特に重要なのは、考察対象とする地域を西洋世界に限定せず、より広い地域を射程に収めることである。無論、これこそが「西洋」あるいは「アジア」の都市である、というような典型は存在しないが、ヨーロッパにおける都市とアジアにおける都市を比較して考察することは本研究にとって極めて有効であると考えられる。

このような比較研究の視座が重要となる第一の理由として、アジアとヨーロッパの都市を互いに対照的なものとして捉えてきた長い学問的伝統が存在することが指摘できる。この伝統の端緒は、一九二一年のマックス・ウェーバーによる提言に遡ることができるだろう。ウェーバーは、アジアではヨーロッパに比べて地方自治による自己決定あるいはコミ

ユニティの意識が出現することは極めて稀だった、と主張した(23)。ウェーバーのこうした見解を必ずしも額面通りに理解すべきではないとする重要な指摘にもかかわらず、ウェーバーの思想は世界各地の都市間の差異に対する考え方に大きな影響を与え続けてきた。例えば Peter Burke は、近著 *Oxford Handbook of Cities in World History* 『オックスフォードハンドブック：世界史のなかの都市』において、物質的、空間的差異がアジアとヨーロッパの都市文化にどのような影響を与えたかを強調している。ヨーロッパの都市とは対照的にアジアの都市には大きな広場が存在しない場合が多く、加えて、アジアの都市は碁盤目状に建設されていることが多い、と Burke は主張する。Burke によればこの両方の要素が、都市の社会性さらには都市行政がどの程度住民を管理できたのかにまで大きな影響を及ぼしたという(24)。また、宗教上の差異も重要であり、女性と男性による都市空間の使用のされ方に影響を及ぼす可能性がある。アジアの都市環境では儒教、仏教、イスラム教がジェンダーの規範に大きな影響を及ぼしたがキリスト教が果たした役割は限定的であるのに対し、ヨーロッパではキリスト教が支配的である(25)。これらの相違点から、都市空間のジェンダー化についても、アジアとヨーロッパでは異なる特徴が見られるのではないかという推定が成り立つと考えられるのである。しかし、もし本研究によってこの推定を覆す結果が得られたとすれば、極めて重要な調査結果となるだろう。この点についてはとくに、近年ますます多くの歴史家が、地理的な位置あるいは特定の大륙文化(「ヨーロッパ」「アジア」など)によって社会間の相違を説明できるという前提に立つことには慎重であるべきだと強調していることから重要であるといえる。ひとくちに「ヨーロッパの都市」といってもひとつひとつ違う都市であり、また、近年ではヨーロッパとアジアをひと続きの地域(「ユーラシア」または「ユーラシア大陸」として考えるべきだという意味見もますます強くなってきている(26)。このことは、本研究がこの地域の都市を考察対象として選択する第二の理由とも関連している。ユーラシア大陸の大都市は一六〇〇年から一九〇〇年の間に集中化が進み、また時代を追うごとにより多くの共通点が見られるようになっていったと考えられてきた。このことは必然的に、都市生活者の生活にも大きな影響を与えてきた。Amy Stanley が *American Historical Review* 上で発表したユーラシアの

住み込みの使用人についての論文で説得力をもって示したように、初期近代の西ヨーロッパと東アジアの重大な相違点にもかかわらず、メイドとして働いていた若い女性の都市生活における経験は様々な点で共通しているのである(29)。スタンリー論文はまた、全世界的なスケールでより多くの定住生活者集団、つまり長距離移住者でなく、またその生活様式がそれほど国際的な様相を呈していない人々の日常生活を観察することが本質的に重要だと指摘している。

『自由』空間としての街路」プロジェクトの中核をなすのは、江戸（現代の東京）と阿姆斯特ダムという二つのケーススタディである(28)。この二都市には、急速な都市化、非常に多くの移住者や季節労働者の存在、比較的小さな居住空間に暮らす小規模核家族世帯が主流だったことなど、複数の共通点がある。またどちらの都市にも「黄金時代」と呼ばれる時期があり、阿姆斯特ダムは一五八五年頃から一六五〇年頃まで、江戸の場合は一六八八年から一七〇四年頃「訳注…元禄文化を指す。このほか化政文化（一八〇四〜一八三〇年頃）は江戸の町人文化の黄金時代といえる」がその時期にあたるとされる。この時期には両都市において、商店文化の繁栄とともに商店巡りやショッピングがひとつの娯楽形態として形成され、それによって女性がより頻繁に通りに姿を見せるようになった(29)。しかしまた同時に、両都市の間には見過ごせない重要な相違点があることもまた確かである。物質的側面、移動、都市行政、ジェンダー比率などにおける両都市間の相違点は、前述したアジアとヨーロッパの都市生活環境の違いを反映している。

江戸の街は複数の異なるゾーンに分割されており、そのいくつかの地区は碁盤目状に街が建設されている。これらのゾーンは江戸の都市における身分制を体現しており、將軍の居城を中心として螺旋を描くように都市が構成されている。江戸城の周りを囲むリング上に大名屋敷が並び、さらにその外周の地区に職人と商人（町人）がいる。一方の阿姆斯特ダムでは、江戸に比べて様々な地区のなかに社会的属性が異なる人々が混在する度合いが高い。また、都市が拡張されていく過程において都市計画が重要な役割を果たしたが、その影響力は阿姆斯特ダムにおいては江戸の場合ほど徹底したものではなかった(30)。ジェンダー規範に目を向けてみると、阿姆斯特ダムは女性が自由で自立していたことで

よく知られている(31)。これに対し江戸の女性が享受することができた移動の自由は阿姆斯特ダムの女性たちよりもずっと制限されていたとされる。しかしここで強調されなければならぬのは、近年の研究において、江戸の女性たちもこれまで長く考えられてきた以上に様々な活動の機会を得ていた可能性が指摘されている、ということである(32)。また、都市行政の仕組みも異なっている。阿姆斯特ダムでは都市市民が行政を担っており、組織の枠組みもフレキシブルだった(33)。一方江戸は征夷大将軍の統治下に置かれ、幕府より任命された各地域の小規模な行政組織が日常の様々な問題に関する実的な行政を担った。最後に指摘されるべき相違点として、男女の人口比率の問題がある。港湾都市として栄えた阿姆斯特ダムは女性が占める割合が高く(34)、他方、いわゆる「城下町」と呼ばれた江戸はむしろ男性の街であり、男性の数が女性を上回っていた(35)。これらの共通点と相違点ゆえに江戸と阿姆斯特ダムは、都市生活のあり方が性別によっていかに特徴付けられるのかを検討する上で他にはない比較対象となり得るのである。

江戸と阿姆斯特ダムの二都市をとくに比較対象に選択するもうひとつの重要な理由は、入手可能な一次資料および二次資料の特徴にある。どちらの都市についても入手可能な資料は質的にも量的にも共通するところが多い(36)。どちらの都市についても、都市の条例や保全についての資料や裁判資料などの膨大な文字資料のほか、版画や素描のほかとくに阿姆斯特ダムについては絵画の貴重な画像資料のコレクションが遺されている。本研究ではこれらの資料に加えて、当時の都市生活のあり方について洞察をもたらしてくれる旅行記や同時代の歴史書や文学作品なども分析の対象とする。日記や書簡はまさに個人が都市空間をどのように移動し経験したのかを示す示唆に富む資料といえるだろう。

本研究プロジェクト『自由』空間としての「街路」は江戸と阿姆斯特ダムに焦点をあてるが、これら両都市の研究を通して得られた考察をさらにユーラシアの都市空間というより大きな枠組みに位置付けて捉えることを目指す。これにより、この二都市から導き出された観察結果が、ユーラシア地域の他の都市における街路の使用のされ方のパターンとどの程度まで共通しているのかを検証することができるだろう。この点については別の都市のケーススタディを加えていくことが有効だと考える。例えば、阿姆斯特ダムとベルリ

ンを都市の緑地とジェンダーの関係という観点から体系的に比較する別の研究プロジェクトが並行して進められている(32)。宮廷文化の強力な後押しを受けて積極的な緑地化が進められたベルリンは、そのような劇的な変化に乏しい市民の街アムステルダムと興味深い好対照を成す。さらに、バタフィアにおける移動とジェンダーの関係を主題としたもうひとつの研究もこれに加えられる。この研究により、東アジアの都市に比べてジェンダー規範がそれほど厳格ではなかった東南アジアの植民地都市における女性たちの街路の利用にかんする洞察がもたらされるだろう。ヨーロッパとアジアの都市史やジェンダー史研究の専門家と協働することによって、このような比較考察の枠組みをさらに広げ考察を深めていきたいと考えている(38)。本研究が最終的に目指すのは、一六〇〇年頃から一八五〇年頃までのユーラシアの都市空間とジェンダーにいかなる関係があったのか、という問いに対するひとつの答えを導き出すことである。

3 研究の手法とメソドロジー

上述した問題に取り組むうえで本研究プロジェクトが直面しまた挑戦することになるのは、重大な方法論上の課題である。都市の構造、人々の移動やジェンダーについての考え方、都市における規制などを地図上にマッピングして落とし込むだけでなく、人々による街路の利用のパターンや傾向を解明することが本研究の最終的な目標である。この問題を解決するために本研究では、スウェーデンのウプサラ大学で実施された「Gender and Work (ジェンダーと仕事)」研究プロジェクト(39)のメソドロジーをもとに、新たな研究手法を考案した。「ジェンダーと仕事」プロジェクトは、産業化以前のスウェーデンにおける男性と女性の特に労働のパターンを、法令文書における証言記録をもとに分析したものである。この問題について体系的な分析を行うためにスウェーデンの研究チームが開発したのが、「Verb-oriented method」(動詞分析メソッド)である。このメソッドでは、資料に記載されている職業名(すなわち名詞)ではなく、活動内容の描写つまり動詞に着眼して分析する(40)。この方法論により過去の時代の労働の実態をより正確に把握できるだけでなく、従来の研究において職業名からはその仕事の内容が解明されてこなかった人々のグループ

についても実態が把握できることが示された。そしてまさにこの後者の文脈において女性が重要な意味を持つのである。このメソドロジの長所は、多種多様な種類の資料に適しているという点である。すなわち、法令文書はもちろん、日記や書簡から会計記録まで幅広い種類の一次資料について体系的かつ定量的な調査が可能となるのである(41)。また、資料の扱い方について一定の慎重な手続きを踏まえば、このメソドロジを初期近代の都市における日常生活のさまざまな側面を描写した視覚資料や文学作品などの資料に応用することも可能と考えられる。

本プロジェクトでは、この動詞分析メソッドを応用して活用する。すなわち、動詞分析メソッドにおいて力点が置かれていた労働(の内容)から出来事が起きる「場所」に焦点を移し、同時に、労働に限らずひとつの資料で言及されているすべての活動を考察の対象とする。これにより、都市空間が利用される様々な状況と方法のシステマティックな検討が可能となるだろう。また、異なる社会的背景や年齢層の人々についての考察ができるだけでなく、路地や街路、大通りなどの建造された都市空間から、公園や庭、郊外などの緑地まで、都市における多種多様な空間を分析の対象に含めることができる。さらにこの方法論によって、都市空間のジェンダー化を、一日のうちの異なる時間帯や一年のうちの異なる時期、異なる季節による変化の点からも考察することが可能となるのである(42)。

本研究プロジェクトの実施期間中に、このメソドロジを用いて可能な限り様々な種類の資料を分析したいと考えている。プロジェクトの初期段階としてまず、アムステルダムの公証人証言記録と江戸時代の日記資料に取り組んだ。いずれの資料の調査でも、このメソドロジがどのような点においてとくに効果的かが示される結果となった。アムステルダムについて扱った公証記録は、公証人が作成した書類だが、この公証人は同時にアムステルダムの高官役人の事務員も兼務していた(43)。これら目撃証言の公聴会の記録には、例えば「あなたは、私が通りを通行するのを禁ずることはできない」(‘*si j kunt mij immers de weg niet verbieden.*’)とあり、街路の使用に直接言及する同時代人の生の声が記されているだけでなく、あらゆる種類の背景的情報も含まれており、これらを組み合わせることによって初期近代の街路の生活情景を描出することができるのである(44)。一

例として、一七一〇年にヤネティ・ヤンスという人物とその大家ヤン・バプティストの間で起きた衝突事件を挙げる。アウデザイツ・フォールバーフワルの路地でこの衝突が起きたとき、バプティストは「(ヤンスが)ポッフエルチェ」[訳注：オランダの伝統的なパンケーキ]を焼いていた小屋は彼女のドアの前に立っていた」(‘het huisje daar [Jans] poffertjes in bakt, staande voor haar deur.) ことを持ち出している。このようにこの資料からは、ヤンスが路上で行なっていた仕事の様子を垣間見ることができ、さらに当時のビアカーイ(Bierkaai)界隈の路上でポッフエルチェが焼かれていたこと、(そしてまたおそらく)調理されてアムステルダム市民の口に運ばれていたであろうことが推測できるのである。また、これらの資料を参照することにより、都市内部間の人々の移動を再構成することも可能となる。証言記録から、バプティストは中世に建設された旧市街中心部にある同じ通りに住んでいたが、画工として海軍の造船所に勤めていたことが分かる。これらのことから彼は、仕事がある日には自宅と職場の造船所間の一・五から二キロメートルほどの距離を往復していたであろうと推定できるのである。このような発見は、初期近代の都市生活者の活動範囲についての洞察をもたらしてくれる(45)。さらにこの公証記録は、一日のどの時間帯に人通りがあるのか、人々はどの通りに立ち寄ったのか、彼らは単独で行動していたのか誰かと一緒にいたのか、といった人々の行動パターンについての情報ももたらしてくれる(46)。このように十八世紀のアムステルダム市民の公証記録は並外れて情報量に富む一方で、ひとつの欠点がある。それは、これらの資料は個々の人物についての詳細な情報を含むが、しかし、それらの人物およびその移動や都市空間の使用を捉えた描写は、ひとつまたはごく少数の出来事の記述しか含まれていないということである。これはすなわち、多くの人々についてごく一瞬の出来事についてしか知り得ない、つまり、公証人によって記録された出来事が目撃されたまさにその瞬間に彼らが都市のどの場所にいたのか、という情報のみしか得られないということである。この問題は、本研究プロジェクトで現在江戸についての主な調査対象としている資料、すなわち日記においては大いに状況が異なる。

日記資料においては、多数の異なる人々の(多くの場合個別の人物の)行動についての

記述ではなく、むしろ、ひとりまたはごく少数の特定の人物の多岐にわたる行動についての洞察を得ることができる。これまで江戸時代の日記は、特権階級の人々の日常生活にかんするとくに質的分析のために用いられてきた(43)。武家に生まれた女性であった黒田土佐子(一六八二―一七五八)の日記は、この種の資料が街路の生活や都市内部の移動についてより量的な分析を行う上でも豊富な情報源となり得ることを示している。一七三五年から一七五三年までの間に土佐子は様々な目的のために外出している。寺院への参拝や家族親類の訪問のほか、屋外の様々な場所へ伝統的な祭りに出かけ、また、春には花見、秋には紅葉を見に出かけている。この日記をもとに、年齢を重ねるにつれて土佐子の移動パターンにどの程度の変化が生じたのかを検証することもできる。この検証には、日記の記述から得られた土佐子の移動パターンに関する観察結果を地図上にマッピングする方法が特に有効である。例えば、土佐子が若い頃に参拝していた寺院は、彼女が晩年になってから訪れた寺院に比べてずいぶん遠い距離にあることがわかる。また、彼女の特に若い頃の移動距離がきわめて長距離に及ぶことから、彼女の移動手段は徒歩や馬や駕籠ではなく、おそらく往來用の小舟を利用したと考えられるのである。さらに土佐子の日記は、都市内部における彼女の日常生活が、前述した江戸の社会的、物質的構造に照応するものであることを示している。つまり、土佐子の行動範囲は主に螺旋状の江戸の中心部かまたは寺院が建立された周縁部のいずれかに留まっており、これはちょうど武士の家系に出自をもつ人々が往來するにふさわしいと考えられていたエリアに合致するのである(44)。このように、土佐子の日記をはじめ、日記資料についてさらなる体系的な定量分析を行うことができわめて有効であると考えられる一方で、この種の資料にもやはり方法論上の問題があることは否定できない。その問題とはすなわち、日記資料においては登場する個人(書き手)は常に人口のなかの特定の社会階層(すなわち文人)に出自を持つ、ということである。では、いかにして個々の事例を超えて全体的な傾向を示す総合的なデータを取得し、初期近代の都市における街路の使用を体系的に比較することができだろうか。

この問題に対する解決策として本研究プロジェクトは、歴史的「ビッグデータ」の集積、そしてとりわけ街路の利用に関する観察結果を同時代の地図上にマッピングする方法を提

示したい(49)。そのためには様々な資料から抽出し収集される情報を関係型データベース上に体系的に蓄積する必要がある。この関係型データベースには、街路の生活風景のひとこま(いわゆる「スナップショット」)を構成する「出来事」「人物」「場所」という三つの上位カテゴリーが設けられている。そしてこれらのスナップショット情報を、ジオリファレンスされた歴史地図上に書き込むのである。観察結果のなかには、その人物が移動しているなどの理由で、一部位置情報を正確に把握できない場合もある。これは方法論上の課題であるが、ひとつの解決策としては、路上で販売する物売りに関する社会科学的研究で用いられている事例に則る方法が考えられる。現代アジアの研究者である Annette Miae Kim は、いわゆる「ゴーストマップ」と呼ばれる手法を用いている。彼女はホーチミン市内の行商人とその顧客および行人の動きを、これまでにない新しい視覚化の手法によって地図上に表現することに成功している(50)。本研究プロジェクトは、これに類似した方法を活用し、過去の都市空間における移動の考察を可能にしようとするものである。これまでに本研究で使用した資料だけでも、すでにかなり多くの情報を得ることができた。本研究でこれまでに扱った江戸時代の日記資料からは、2人の人物について合計七十七件のスナップショットを抽出し分析することができた。一方アムステルダム の公証記録については、一七五〇年の一年分の資料に限ってもすでに千人以上の人物に関するデータを地図上にマッピングすることができた。データベース上に集められた情報を分析する際には、規則や法令、街路の利用をめぐる争いごとの記録、道徳規範などにかんする文献、建築空間についての情報など、そのほかの規範的情報と組み合わせることで、規範と実態はどのような関係にあったのかを考察する。

ジェンダーと都市空間の関係性の理解を深めるための第二の方法は、三次元(3D)描画によっていくつかの街路をデジタル復元する手法である(51)。江戸のように当時の街並みがほぼ存在していない、あるいはアムステルダムのように劇的に変化した初期近代都市の姿を、より大きな空間的広がりにおいて理解しようとする上で、3Dデジタル復元は重要な手段となるだろう。前述したように、本研究が設定している仮説のひとつは、都市のインフラが街路の使用のジェンダーによる分節化に影響を及ぼしているのではないか、と

いうものである。歴史記述における重要な主題のひとつは、たとえば、窓やバルコニーが女性の街路の利用の仕方を与える影響である(52)。バルコニーや窓際にいる人々と街路を行き交う人々の接触は、その街路におけるジェンダー的力学にどのような作用を及ぼすのか。男性と女性によって、道を歩くときに人々にその姿を捉えられる「見られ方」はどの程度まで違いがあったのか。このような疑問に対する答えを見出すべく、本研究ではアムステルダム大学4Dリサーチラボと協働して江戸およびアムステルダムのいくつかの街路のデジタル復元に取り組む(53)。このデジタル復元は、最終的には、本プロジェクトの研究成果をより広く一般の人々に知ってもらおう上でも、人々の関心を集めるすぐれた手段ともなるだろう。

結びにかえて——街路の世界史に向けて

これまで述べてきたように、『自由』空間としての街路「プロジェクトでは、今後数年間の研究期間においていくつかの野心的な目的を達成することを目指す。そのなかでも最も重要な課題が、ユーラシアのいくつかの都市において屋外空間はどのように女性と男性によって使用されたのかをマッピングし分析することである。これを通じて、過去の時代の都市空間におけるジェンダーによる分節化をめぐる議論に貢献するだけでなく、人々の「日常」の歴史、物質文化と人間の行動の関係性に関する議論にも寄与することを目指す。さらに、多くの場合きわめて捉えがたい束の間の現象である「都市における移動」という問題について、同じくつかみどころのないその痕跡を捉まえ明らかにするために必要なデジタル技術メソッドの開発にも貢献したいと考えている。

ジェンダーにせよ(都市)空間にせよ、いずれも多様な要素から成る複合体であり、その実体の研究そしてその核心を突く洞察に至ることが難しい問題であることは確かだが、しかし同時にまた現代あるいは歴史的な都市社会を理解するうえで避けて通ることのできない重要な問題でもある。様々なタイプの一次資料から都市の利用に関する観察を抽出するために本研究プロジェクトが考案してきたメソッドロジーによって、都市空間の利用についてこれまで以上に高い精度の洞察を得ることができるようになった。たとえば、街路の

風景が時代とともにどのように変化したのかを調査できるようになっただけでなく、季節や曜日、あるいは一日のうちの時間帯によっても観察が可能となった。ひとくちに都市といっても、文化的コンテキストや歴史的伝統は様々であり、またそれゆえにそれぞれの都市について残されている資料の種類も多様である。複数の都市を研究対象とする本プロジェクトでは、それぞれの都市に応じた方法論を適用していき、調査の過程で得られた観察結果を記録するデータベースがより適切なものになるよう改良し続ける。そして将来的にはユーラシアというコンテキストさえも超えていく可能性が期待される。つまり、ユーラシアのほかの都市だけでなく、ユーラシア域外の都市についての研究にも発展させることができる可能性があるのである。まさにここに街路の世界史の考察の道が開かれるのである。

都市社会学においてすでに（再）発見されたように、街路は、広域スケールで都市の社会的発展を考察するためのすぐれた指標となるだけでなく、社会内部における変化の動力そのものでもある(54)。過去の時代の街路の機能について理解が深まることにより、過去の時代の都市社会についても重要な新見も得ることができる。都市社会学では現在もお、すでに近代化した都市が重視されることが多く、前近代や初期近代の都市は「近代都市ではないものすべて」と記述される傾向にあるが、このような新見を通じて本プロジェクトは、都市社会学における歴史学的アプローチの有効性を高めることにも貢献できるだろう(55)。

最後に、「街路の世界史」というアプローチが、地球的視野に立った新しい世界史記述に寄与し得るもうひとつの重要な可能性について言及し、本論の結びとしたい。昨今「グローバルヒストリー」の課題として、世界各地の定住生活民の比較歴史研究の必要性が指摘されている。Amy StanleyがKenneth Pomeranzの言葉になぞらえて主張したように、グローバルヒストリーとは、長距離を移動する移民やコスモポリタンの人々の歴史だけで構成されるべきものではないはずである(56)。事実Pomeranzは次のように述べている。「人類の大多数を占める人々、すなわち比較的狭い地理的範囲の中に生き、そこで生活し続けている人々は世界史に含まれるべきでないと主張するならば、それは不合理とい

うものだろう。」 (57)

(付記)

*本研究は、オランダ学術研究機構 (NWO) の学術研究費助成で実施される二件のプロジェクト “The Freedom of the Streets. Gender and Urban Space in Europe and Asia (1600-1850)” (276-69-007) と “Crafting Nature, Cultivating Gender: Gender and Urban Nature in Berlin and Amsterdam during the long 18th century” (PGW. 18. 021) によって遂行される。

**本論文は *Stadsgeschiedenis 誌* (ed. by Centrum voor Stadsgeschiedenis van het department Geschiedenis aan de Universiteit Antwerpen, Verloren, 2018 no. 2) に掲載されるオランダ語論文 “The Freedom of the Streets. Nieuw onderzoek naar gender en stedelijke ruimte in Eurazië (1600-1850)” の日本語訳である。本論文のオランダ語草稿に多くの助言を与えてくれた *Stadsgeschiedenis* 編集委員に記して御礼申し上げます。蘭文和訳は安永が担当した。脚注は原注のみとし、特に訳注が必要な場合には本文中に「」で示した。脚注で言及された学術書等にすでに邦訳がある場合には翻訳者の知識の及ぶ範囲で日本語の書誌情報を追記した。

(注)

- (1) 例えば次を参照： N. F. Cott, *The bonds of womanhood: woman’s sphere in New England, 1780-1835* (New Haven 1977); J. W. Scott, “Gender: a useful category of historical analysis,” *The American Historical Review* 91 (1986) 1053-1075; L. Davidoff en C. Hall, *Family fortunes. Men and women and the making of the English middle class 1750-1870* (Chicago 1987); M. McKeon, *The secret history of domesticity. Public, private and the division of knowledge* (Baltimore 2005).
- (2) Amanda Vickery, “Golden Age to Separate Spheres? A Review of the Categories and Chronology of English Women. s History,” *The Historical Journal* 36 (1993) 383-414.
- (3) Elizabeth Wilson, *The Sphinx in the City: Urban Life, the Control of*

- Disorder, and Women (Berkeley/Los Angeles/Londen 1992); Laura Gowing, “The Freedom of the Streets: Women and Social Space 1560–1640,” in: Paul Griffiths and Mark S. R. Jenner (ed.) *Londinopolis: Essays in the Cultural and Social History of Early Modern London C.1500–c.1750*, (Manchester 2000); Amanda Flather, *Gender and Space in Early Modern England* (Woodbridge 2007); Lin Foxhall and Gabrielle Neher (ed.), *Gender and the City before Modernity* (Chichester/Malden 2012).
- (4) Wilson, *The Sphinx*.
- (5) プロシエント公式ウェブサイトを参照: <https://www.freedomofthestreets.org/> (最終アクセス日: 2018/7/9).
- (6) Gowing, *Freedom of the Streets*, 134. その他を参照: Amanda Vickery, “An Englishman, s Home Is His Castle? Thresholds, Boundaries and Privacies in the Eighteenth-Century London House,” *Past & Present* 199 (2008) 147-73; Riitta Laitinen, *Order, materiality, and urban space in the Early Modern Kingdom of Sweden* (Amsterdam 2017).
- (7) Gowing, *Freedom of the Streets*, 133-134.
- (8) 例については参照: Melissa Calaresu and Danielle van den Heuvel (ed.), *Food Hawkers. Selling in the Streets from Antiquity to the Present* (Londen 2016).
- (9) Elizabeth S. Cohen and Thomas V. Cohen, “Open and Shut: The Social Meanings of the Cinquecento Roman House,” *Studies in the Decorative Arts* 9 (2001) 61-84; Elizabeth S. Cohen, “To Pray, To Work, To Hear, To Speak: Women in Roman Streets C. 1600,” *Journal of Early Modern History* 12 (2008) 289-311.
- (10) Amanda Vickery, “An Englishman, s home,” in: Lena Cowen Orrlin, “Rights of Privacy in Early Modern English Households,” in: David Gaimster, Tara Hamling and Catherine Richardson (ed.) *The Routledge Handbook of Material Culture in Early Modern Europe* (Abingdon 2017) 423-35.

- (11) Henri Lefebvre, *The production of space* (Oxford, 1991) [邦訳：アンリ・ルン
 エール 『空間の生産』斎藤日出治 (訳) (青木書店 2009)]・Michel de Certeau, *The
 practice of everyday life* (Berkeley and Los Angeles, 1984) [ケン・ヘン・ド・ヤン
 ー 『日常の実践のポエティック』山田登世子 (訳) (国文社 1987) ; Cohen, ‘To
 Pray, To Work. ; Danielle van den Heuvel, ‘Policing Peddlers: The Prosecution
 of Illegal Street Trade in Eighteenth Century Dutch Towns. , *The Historical
 Journal* 58 (2015) 367-92; Till Grallert, ‘To whom belong the streets?
 Investment in public space and popular contentions in late Ottoman Damascus,
Bulletin d. etudes orientales (2012) 327-359; André Sorensen, ‘Neighborhood
 Streets as Meaningful Spaces: Claiming Rights to Shared Spaces in Tokyo. , *City
 & Society* 21 (2009) 207-29.
- (12) Katherine W. Rinne, ‘The Landscape of Laundry in Late Cingquecento Rome. ,
Studies in the Decorative Arts 9 (2001) 34-60.
- (13) 都市空間における移動パターンと社会的ステータスや職業の相関性にかんする重要
 な先行研究として、Robert Shoemaker, ‘Gendered Spaces: Patterns of Mobility
 and Perceptions of London. s *Geography*, 1660-1750. , in: J. F Merritt (ed.)
*Imagining Early Modern London: Perceptions and Portrayals of the City from Stow
 to Strype*, 1598-1720, (Cambridge/New York 2001).
- (14) Rinne の Shoemaker による研究のほか、次の先行研究にも、このような事例が挙げら
 れる。Cohen, ‘To Pray, To Work, To Hear, To Speak. ; Gowing, *Freedom of the
 Streets*; Robert Charles Davis, ‘The Geography of Gender in the Renaissance. ,
 in: Judith C. Brown and Robert Charles Davis (ed.), *Gender and Society in
 Renaissance Italy*, (Londen 1998) 19-38.
- (15) Stadsarchief Amsterdam (NL-AsdsSAA), *Archief van de Notarissen ter
 Standplaats Amsterdam*, inv.nr. 8068, Gerard van Esterwege, *Minnutacten 1710
 Februari 28 - 1710 December 28*, 101. これについては次のブログ記事も参照：Bob

- Pierik, ‘Using ‘pre-crime scenes. for the historical urban ethnography of early modern Amsterdam. , Gender and Work in Early Modern Europe (weblog) 2017. <https://workandgender.wordpress.com/2017/12/01/using-pre-crime-scenes-for-the-historical-urban-ethnography-of-early-modern-amsterdam> (最終アクセス日：2018/7/5).
- (16) Di Wang, Street Culture in Chengdu: Public Space, Urban Commoners, and Local Politics, 1870–1930 (Stanford 2003) [=王笛 (著) 『街头文化：成都公共空间』 下层民众与地方政治, 1870-1930] 李德英・谢继华 (訳) (中国人民大学出版社‘2006)].
- (17) Arlette Farge, *Vivre dans la rue à Paris au XVIIIe siècle* (Paris 1974); Laurie Nussdorfer, ‘The Politics of Space in Early Modern Rome. , *Memoirs of the American Academy in Rome* 42 (1997) 161-86; Filippo de Vivo, ‘Walking in Sixteenth-Century Venice. , *I Tatti Studies in the Italian Renaissance* 19 (2016) 122; Andrew Gordon, ‘Materiality and the Streetlife of the Early Modern City. in: Richardson, Hamling and Gaimster (ed.), *Routledge Handbook of Material Culture*, 130-40.
- (18) 次々参照: Sanne Muurling and Marion Pluskota, ‘The Gendered Geography of Violence in Bologna, Seventeenth to Nineteenth Centuries. in: Deborah Simonton (ed.) *The Routledge History Handbook of Gender and the Urban Experience* (London 2017) 153-63.
- (19) Rinne, ‘The Landscape of Laundry. .
- (20) Lewis Mumford, *The Culture of Cities* (London 1938) [=ムンク・マン・トーン (著) 『都市の文化』 生田勉 (訳) (鹿島研究所出版会‘1974) ; Richard Sennett, *The Fall of Public Man* (New York 1977) [=リチャード・セネット (著) 『公共性の喪失』 北山克彦・高橋悟 (訳) (晶文社‘1991)].
- (21) への問題を扱った先行歴史研究史の詳細は次々参照。Danielle van den Heuvel, ‘Gender in the Streets of the Premodern City. , *Journal of Urban History* (2018)

1-18 (Doi: 10.1177/0096144218768493).

(22) 但し、各ケーススタディによって調査対象に含まれる年代は多少異なる。例えば江戸（東京）についての研究では、日本における近代の幕開けと見做されることの多い明治時代が始まった1868年前後までを考察の対象に含めるのは理に適っているだろう。

(23) Max Weber, *The City* (New York 1966).

(24) Peter Burke, "Culture: Representations. , in: Peter Clark (ed.) *The Oxford Handbook of Cities in World History* (Oxford 2013), 438-452.

(25) Barbara Watson Andaya, "Gender History, Southeast Asia, and the "World Regions. Framework. in: Teresa A. Meade and Merry E. Wiesner (ed.), *A Companion to Gender History* (Malden 2006) 323-42.

(26) Masashi Haneda, *Toward Creation of a New World History* (Tokyo 2018) [= 和田正『新しい世界史く 地球市民のための構想』(岩波書店' 2011)] .

(27) Amy Stanley, "Maidservants. Tales: Narrating Domestic and Global History in Eurasia, 1600-1900. , *The American Historical Review* 121 (2016) 437-60.

(28) 江戸については、ヨーロッパの他の都市と比較した研究がすでにいくつもある。例えば次を参照：James L. McClain, John M. Merriman, and Kaoru Ugawa (ed.), *Edo and Paris: Urban Life and the State in the Early Modern Era* (Ithaca 2001) [= シンハイムス・L・マックレーン' ション・M・メリマン' 鶴川馨 (編) 『江戸・パリ』(岩田書院' 1995)] ; T. Ito and K. Kondo (red.), *Special Issue of Urban History Studies: Edo and London* (2007) [= 近藤和彦・伊藤毅 (編) 『江戸・ロンドン』(別冊都市史研究) (山川出版社' 2007)] . また' *Journal of Urban History* の特集号には近代日本の都市をグローバルな視点から考察した論考がある：Carola Hein (ed.), *Japanese cities in global context, special section of the Journal of Urban History* (2016).

(29) J. H. Furnée, and C. Lesger (ed.), *The Landscape of consumption: Shopping streets and cultures in Western Europe, 1600-1900* (Basingstoke, 2014). また次を参照：Jan-Hein Furnée, "Winkelen als bevrijding? Vrouwen en de stedelijke

- ruimte in Amsterdam, 1863-1913. , *BMGN-Low Countries Historical Review* 130 (2015): 92-122.
- (30) トマス・スミス『都世の拡張』(1667) Abrahamse, De grote uitleg van Amsterdam (Bussum 2010) や、また近隣ロレンス・ニコラ・ド・ワルデの『社会的多様性の問題』(1674) Clé Lesger and Marco H. D. Van Leeuwen, “Residential Segregation from the Sixteenth to the Nineteenth Century: Evidence from the Netherlands. , *The Journal of Interdisciplinary History* 42 (2012) 333-69 や参照.
- (31) Danielle van den Heuvel, *Women and Entrepreneurship: Female Traders in the Northern Netherlands, C. 1580-1815* (Amsterdam 2007), 40-43. 他に次の参照: Kloek, Els, Nicole Teeuwen and Marijke Huisman, *Women of the golden age: an international debate on women in seventeenth-century Holland, England and Italy.* (Hilversum 1994).
- (32) Laura Nenzi, *Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan* (Honolulu 2008); Marcia Yonemoto, “Outside the inner quarters: sociability, mobility and narration in early Edo Period women. s diaries. , *Japan Forum* 21:3 (2010) pp 389-401; Amy Stanley, *Selling Women: Prostitution, Markets, and the Household in Early Modern Japan* (Berkeley/Los Angeles/Londen 2012).
- (33) Willem Frijhoff and Maarten Prak (ed.), *Geschiedenis van Amsterdam. Zelfbewuste stadstaat, 1650-1813* (Amsterdam 2005).
- (34) Lotte van de Pol, *Het Amsterdams hoerdom. Prostitutie in de zeventiende en achttiende eeuw* (Amsterdam 1996), 106-114.
- (35) Katō Takashi, “Governing Edo. , in: McClain, Merriman and Ugawa, *Edo and Paris, 41-67*; Matsunosuke Nishiyama, *Edo Culture: Daily Life and Diversions in Urban Japan, 1600-1868*, ed. and transl. by Gerald Groemer (Honolulu 1997).
- (36) 高橋元貴 「江戸の娼世史」(Genki Takahashi, “A Review of Urban History in

- Early Modern Japan: Focusing on Edo as Castle Town.) 『建築史学』66 (March 2016): 68-107.
- (37) への研究は ‘Crafting Nature, Cultivating Gender, とくう別の研究プロジェクトの枠組みで進められる’。
- (38) 東京大学との共同ワークショップ (2017年) およびベルファストで開催された European Social Science History Conference のパネルセッションを参照。
<https://www.freedomofthestreets.org/results/> (最終アクセス日: 2018/7/5).
- (39) 公式ホームページを参照: <https://gaw.hist.uu.se/> (最終アクセス日: 2018/7/5).
- (40) Rosemarie Fiebranz et al., ‘Making Verbs Count: The Research Project ‘Gender and Work, and Its Methodology. , Scandinavian Economic History Review 59 (2011) 273-93.
- (41) Maria Ågren (ed.), Making a Living, Making a Difference: Gender and Work in Early Modern European Society (New York 2017).
- (42) 街路における多様な視点の重要性については例えば次を参照: C. R. Corley, ‘On the Threshold: Youth as Arbiters of Urban Space in Early Modern France. , Journal of Social History 43 (2009) 139-156; C. Koslowsky, Evening, s Empire: A History of the Night in Early Modern Europe (Cambridge 2011).
- (43) S. Faber, Strafrechtspleging en criminaliteit te Amsterdam, 1680-1811 (Arnhem 1983) 102-103; W. Heersink, ‘Het notariaat en de 18e eeuwse Amsterdamse strafrechtspleging. , in: M. A. Moelands and J. Th. de Smidt (ed.), Weegschaal & zwaard: de verbeelding van recht en gerechtigheid in Nederland (Den Haag 1999), 36-40.
- (44) Stadsarchief Amsterdam (NL-AsdsSAA), Archief van de Notarissen ter Standplaats Amsterdam, inv no. 8068: Minnuacten Gerard van Esterwege, 227-229.
- (45) への史料については次の文献を比較された: Shoemaker, ‘Gendered spaces. ;

- David Garrioch, *The making of revolutionary Paris* (Berkeley 2002) 252-253.
- (46) Bob Pierik, ‘Gender and intra-city mobility in 18th century Amsterdam,’ paper presented at the European Social Science History Conference, Belfast 2018.
- (47) 例えは次を参照：Yonemoto, ‘Inner quarters.’; Nenzi, *Excursion*; Bettina Gramlich-Oka, *Thinking like a man: Tadano Makuzu* (1763–1825) (Leiden 2006) [=『シテイーナ・グラムリヒニオカ (著) 『只野真葛論：男のように考える女』上野未央 (訳) (岩田書院 2013) 』]
- (48) Beblio Vieira Amaro, ‘Gender and urban space in Edo,’ paper presented at the European Social Science History Conference, Belfast 2018.
- (49) Maria Ågren ヲチヲノリスルニ於テ参照：Ågren, *Making a Living*, 13.
- (50) Annette Miae Kim, *Sidewalk City: Remapping Public Space in Ho Chi Minh City* (Chicago/London 2015).
- (51) Donatella Calabi (ed.), *Built City, Designed City, Virtual City: The Museum of the City* (Rome 2013).
- (52) Cf. Alexander Cowan, ‘Seeing Is Believing: Urban Gossip and the Balcony in Early Modern Venice,’ *Gender & History* 23 (2011) 721-38; Irene Cieraad, ‘Dutch Windows: Female Virtue and Female Vice,’ in: Irene Cieraad (ed.), *At Home: An Anthropology of Domestic Space* (Syracuse University Press, 2006), 31-52.
- (53) <http://www.4dresearchlab.nl/> (警察へのインタビュー：2018/7/5)
- (54) Suzanne Hall, *City, Street and Citizen. The Measure of the Ordinary* (London/New York 2012); Phil Hubbard and Dawn Lyon, ‘Introduction: Streetlife - the Shifting Sociologies of the Street,’ *The Sociological Review* (2018), 1-15
Doi: 10.1177/ 0038026118771281.
- (55) 例えは Lyn H. Lofland, *The Public Realm Exploring the City. s* Quintessential Social Territory (New Brunswick 2009), 15-18.
- (56) Stanley, ‘Maidservants. Tales.’.

(57) Kenneth Pomeranz, "Social History and World History: From Daily Life to Patterns of Change," *Journal of World History* 18 (2007) 72.